生物多様性未来継承プラン（仮称）検討委員会

日　時　　平成 30 年 8 月 1 日（水）16 時～18 時
場　所　　京都平安ホテル　呉竹の間

【委員等】細谷座長、浅野委員、加藤委員、佐久間委員、竹門委員、辻本委員、戸部委員、鳥居委員、渡部委員、三橋参考人
【オブザーバー】石崎副課長（文化財保護課）
【事務局】金谷副部長、藤岡課長、四方副課長、小田嶋主任

議事（１）講演「生物多様性情報の入口から出口まで」（三橋参考人）

・生物多様性情報の収集・利活用をどのように社会の仕組みの中に入れるかが課題。
・多くの人にデータを活用してもらうには、データを集めるだけでなく、データの解析技術と、活用してもらうための計画が必要。協働する人材の育成、多様な主体の連携をセットで考える必要がある。市民や学校教育との協働・連携が重要。
・当館では、既存のデータを集めて整理し、モノグラフとして公表している。事業者が事業を行う際には、モノグラフを見ればあらかじめ希少種などの生息地がわかるので、事前に対策をすることが可能であるし、軋轢を避けることもできる。
・また、行政へのアドバイス、市民や企業との連携による事業も行っている。当館ではこのような仕事を community think tank と位置づけている。当館の設置条例には行政支援や環境保全が明記されており、それは他の博物館と違う点である。
・多くの人を巻き込むためには、既存の行政施策の枠組みを超えた形での連携が重要。当館では、学校教育や自然観察会、博物館のイベントなどと組み合わせて、多様な入口を設定している。そうして集まった情報もデータベースに登録していく。
・そうして多くの入口から集まったデータを、様々な形で使える状態にするよう、プラットフォームを作って運営している。データベースを活用した様々なアクションが起こり、それに興味を持った人がそこに参加していく、という循環を作っていくことが、生物多様性を広く市民や日常に浸透させるひとつの方法である。

【質疑応答、その他意見など】
・京都府において、人材育成、情報収集、資料の管理、発信までがひととおりできるような最少ユニットは、どれくらいの人数だろうか。
　→・15 人ほどいれば、いろいろなことが役割分担できると思う。
　　・最少人数については答えにくいが、少なくとも、4～5 人というレベルではない。
・少ない人数で始めるのであれば、相当スリム化して、「まずここから」という形にしなければ難しいということだろう。
・「入口と出口」について、現時点での成功例としてはどのようなものがあるのか。
　→・自然史系施設における展示や運営、高校生であれば学会での発表や博物館での展示な

どの出口がある。
・「小さな自然再生」（市民が自分たちで楽しみながら、無理のない範囲で少しずつ自然再生を進めていくもの）も出口の一つ。
・生物多様性情報の収集・利活用にあたっては、社会のどこにその需要があるかが重要。世の中には様々な形の需要があるが、その中でも、あまり市場性のないもの（利益を出すことが難しいもの）ということを考えたら、行政内ニーズをうまく拾って、自治体や国などからの需要を掘り起こすことができれば、大きな潜在力があるだろう。
・生物多様性の保全と利活用には、マッチングが非常に重要。生物多様性情報はマッチングのための非常に重要な情報基盤となる。行政はマッチングの際に一番信用があり、マッチングの主体になりやすい。産業、文化財などいろいろ含めて縁組みができるとよい。
・情報の集まり具合によって、データベースには情報が密な部分と疎な部分ができると思われるが、どう考えるのか。
→・ＡＩや機械学習のモデルを使うことで処理することは可能だが、そこが疎だとわかっているなら、結局は現地に行って調査した方が早くて正確。
・データベースを維持するには、そういった情報のアップデートのための投資も必要。
・様々な団体・人との交流の中で、新たな発見があり、疎の部分が埋められることがある。そういった chance making を増やすことが大切。

議事（２）生物多様性未来継承プラン（仮称）の骨子について

【全体について】
・構成について、まず目標があり、それに向けて実行すべきこと、そのために必要な機能、という順番にすべき。「現状と課題」、「目標」、「必要とされる機能」とする方がよい。

【「必要とされる機能」について】
（規模について）
・これらの機能を果たしていくためには具体的にどういった能力（組織、設備、人材など）が必要と考えるのか、より具体的に示してほしい。
・平成 32 年にまず実現したい最初の一歩はどこなのか（最初にミニマムな機能をどこに置くか）、また、10～20 年後にどこまで行きたいのか、というように考えていくべき。
・最初をあまり小さくしすぎると、その後に育たなくなるおそれもある。具体的な機能を果たすために、どういうものを初期段階で備えていればよいかを、明確にした方がよい。
・どういうサイズであっても、そのサイズの根拠を問われる場面は必ず出てくるが、それに対する理論武装があまり十分できていないのではないか。

（機能の目的について）
・ここに挙げられている機能は 4 つとも生物多様性を目的としているが、それでは社会の需要に対して応えられる出口になりにくい。
・「生物多様性に関する情報を分析し、それを必要とされるところに提供する」、「情報の活

用により生物多様性に根差した文化を興隆する」などを目標に書いてはどうか。
・生物多様性に資するような公共事業に対しては、それを推進する機能があるということも記載してはどうか。そうすれば、他の部局の事業に対しても連携・協力をしやすい。
・行政内のニーズにも応えられるものである必要がある。「これがないと京都府が今後の行政の導き役をできない」というものでなければならない。

（人材について）
・政策立案能力、政策企業家的な面も要求されることになる。現場で課題を拾い上げ、政策を提案する人や、行政の中に入って各分野を繋いでいくような人もいる。同じように学校や NPO の中にも入っていくことが期待される。
・大学の教員が兼務するという形も一考に値するのではないか。兵庫県立人と自然の博物館では、研究員の多くが兵庫県立大学の教員でもある。

【「達成したい目標」について】
・「こういう形で保全がしたい」ということをまず書くべき。そのためにセンターが 5 年間でなすべきアウトプット、そしてそのために必要な機能、というように書けばよい。
・万人が理解できるような数値目標が必要なのではないか。数値を設定しなければ、その先の具体的な施策（人を何人揃えるのかなど）は決まってこないはず。
・このプランは、主語は京都府でよいのか。「京都府は誰のためにこれをしたいのか」ということも書くべきなのではないか。
・生物多様性センターのミッションについて、数行程度の、全体を総括したわかりやすい標語ができればよい。

以上